

分科会 ひとづくり



世代や立場を超えて誰もが安心して自分らしく暮らせる“心のバリアフリー”の実現に向けたこれまでの議論について、共通するキーワードを軸に整理していくことが確認されました。

1. 心を開く機会づくり

多様な背景を持つ人の“生の声”を聞くことが、理解を深め、心の壁を取り除く第一歩になるとの意見で一致しました。共感や価値観を受け入れるオープンマインドを育て、悩みを語り合える機会の必要性も話題となりました。

2. 誰もが立ち寄れる“たまり場”づくり

家でも職場でも学校でもない、気軽に立ち寄れる場「第三の居場所（サードプレイス）」に加え、時間や場所にとらわれないサイバー空間を活用した“たまり場”がある未来への意見も出されました。

3. 全員参加のまちづくり

「人が減って」も「人の力を生かす」視点が示されました。個人の得意なことを登録し地域で生かす「講師バンク」構想や、世代交流のきっかけとなるアイデアなど、身近な参加のあり方について共有されました。

4. 「オープン」をキーワードに寄り添うまちへ

「心を開く（オープンマインド）→ 場ができる（オープンスペース）→ 活動が広がる（オープンコミュニティ）→ まちの魅力になる（オープンタウン）」という4段階のイメージが共有され、“寄り添いの心から、寄り添いのまちへ”という未来像が描かれました。

【コーディネーター】

構想日本シニアフェロー 小瀬村 寿美子さん

この分科会での一貫したテーマは「心もオープン、場もオープン、社会もオープン」でした。無作為で選ばれたからこそ、多様な方と出会えたという前向きな感想が多く聞かれました。まさにこの場所から始まるオープンなコミュニティを感じました。

分科会 くらしづくり

提案書素案にまとめられた「くらしの4つの柱」をもとに、参加者が自らの暮らしに引き寄せて意見交換を行い、行政への要望にとどまらず、「まず自分たちにできることは何か」という視点で議論が深められました。

1. いつでも・どこでも・待たずに手続き

ICTを活用した行政サービスの提供をめざすことと、「地域のサポート拠点」「地域の力でデジタルが苦手な人への温かいサポート」の必要性が確認されました。

2. 移動しやすいまちへ

デマンド交通の利用時間やエリア制限などについて、より使いやすくするための意見が出され、公共交通の現状や運転士不足などの課題を共有しながら、解決するための具体的な対話を行いました。

3. 空き家を地域の“資源”に

空き家に関する情報の集め方や届け方について意見を出し合い、地域が主体となった「地域内での空き家把握・活用」の仕組みづくりの必要性が共有されました。

4. 次世代が育つ環境づくり

公園の整備や遊具の更新など、子どもたちが育つ環境づくりについて意見が交わされました。住民が共同で資金を出し合う「公園基金」や、世代間交流により互いに学び合える居場所づくりなど、具体的なアイデアも出されました。

5. 4つの柱以外の意見

住民が知りたい情報を分かりやすく提供する発信の改善が求められ、日常生活での課題解決につながる意見も出されました。

【コーディネーター】大月市職員 坂本 健太さん

参加者皆さんが本当に前向きで、単に町に何かを要請するだけではなく、「自分たちは何ができるのか」「じゃあ、地域でこういうことができるよね」という住民主体（自分ごと）の視点で、非常に多くの意見を出していただきました。

分科会 しごとづくり

若者の町外流出を防ぎ、地域経済を元気にするための5つの提案を中心に、住民と行政がともに「自分ごと」としてまちの未来を考える議論が行われました。

1. 企業の魅力を“見える化”

町内の多様な企業情報が十分に届いていないことが、若者流出の大きな要因と指摘されました。インターネット上の地図サービスから情報が得られる「企業マップ」や、分かりやすくだとり着きやすい情報の必要性が示されました。

2. 働き方と企業風土の改善

労働条件や職場環境、働き方改革などに関する課題が共有され、アンケート実施により環境改善を促す案や、リモートワーク支援など、多様な働き方の選択肢を広げる必要性が示されました。

3. 地場産業の価値の再創出

織物業や農業は課題があるものの、価値の再創出により未来につながる可能性のある産業として議論されました。新商品開発、観光との連携、若手の育成など、地場産業の発展に向けた方向性が確認されました。

4. 挑戦を応援する“場づくり”

新しい挑戦がしづらい地域風土を変えていくことが重要と指摘され、住民がアイデアを語り合い、応援し合える開かれた「場（サードプレイス）」の創出が必要と共有されました。

5. 横並びの意識から、個性の尊重へ

若者が挑戦しやすい文化をつくるためには、外部や新しい価値観を受け入れ、地域に目を向ける施策の充実や世代を超えた理解が欠かせないことが共有されました。

【コーディネーター】浜松市職員 大澄 憲雄さん

議論の核心として出てきたのは、まちづくりに対する意識です。行政も含めたみんなが「自分ごと」という意識を持ち、住民全員が当事者であるという意識を持って、まちを変えていかないと、10年後のありたい姿は実現できない、という結論に至りました。「今日が終わりではなく、これがスタート」。最高のチームでした。



最後にあいさつを述べる山添町長



会議を通しての感想を話す参加者



しごとづくり分科会の様子

10年後のまちの将来像を描く――
第4回よさの未来会議を開催しました
～ 提案書提出に向けた最終議論 ～
令和7年12月7日、野田川わーくばるにおいて、「第4回よさの未来会議」を開催しました。前回（第3回）までの住民の皆さんの意見や声、各分科会での対話内容によりまとめられた提案書の素案が発表されました。最終回となる今回は、「しごとづくり」「くらしづくり」「ひとづくり」の3つの分科会で、提案書素案の内容確認と修正、新たな気づきの共有が行われ、10年後のありたいまちの姿について意見が交わされました。

企画財政課 43・9015



回答フォーム

10年後に残したいモノ・コト
教えてください

与謝野町では、「第3次与謝野町総合計画（令和9年度～16年度）」の策定に向け、よさの未来会議など、さまざまな取り組みを進めています。

第3次総合計画では、新たに「10年後のまちの姿」（将来像）を視覚的に示すイラストの作成を進めており、「10年後に残したいモノ・コト」についてお聞かせいただき、イラストに反映させたいと考えています。

まちの将来像を描く計画づくりには、住民の皆さんの多様なご意見が欠かせません。与謝野町の未来をともに考え、築くため、皆さんの声をお寄せください。